

---

# 一番幸せな誕生日

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一番幸せな誕生日

### 【Nコード】

N6539E

### 【作者名】

ユーリ

### 【あらすじ】

朝風理沙は、泉の家で美希に言った言葉がキツカケでハヤテの事が頭から離れなくなる日が続いた。果たして、この気持ちの答えは何なのだろうか・・・！？

## （前書き）

この話は、『ハヤテのごとく!』第16巻の第7〜第11話のその後の話という設定です。

先に16巻を読む事をオススメいたします。

恋愛って、実に不思議なものだね。

ほんの些細な事がキツカケで、好きになったりするんだからさ。

これは、ある言葉がキツカケで晴れて恋人同士になった、2人の男女のお話である・・・

やあ諸君、元気かな？

私は朝風理沙、花も恥じらう16歳だ。

それでも私は朝風神社の娘で、白皇学院という名門校に通うお嬢様なのだよ、フッフ・・・

ちなみに生徒会役員の1人で、担当は風紀委員だ。

通称『敵か味方が風紀委員ブラック』！

と、そんな事はどうでも良い。

本題を言うと、7月13日は私の誕生日なんだ。

つまり、今日だ。

誕生日プレゼントについては別に心配などしていない。

毎年泉やヒナ達にもらえるからだ。

実際今年ももらえたしな。

物忘れが多い私のおじいちゃんからもこの日だけはちゃんとプレゼントをもらえるし。

それよりも気になっている事が1つだけある。

私のクラスメイトの1人、三千院ナギ君の執事をしている綾崎ハヤテ・・・ハヤ太君の事についてだ。

実は私、なぜかここ数日彼の事が頭から離れないのだ。

こうなった原因は恐らく、以前引きこもってしまった泉を元気づけるためにハヤ太君や美希と一緒に行った泉の家でのあの一言が発端だと思う。

『だって・・・ハヤ太君は私にゾッコンだろ？』

この一言だ。

あの時私は何気なく言ってみただけで、別にハヤ太君が好きだとかいうのはまだハッキリわかっていなかった。

美希には『オマエ・・・ホントバカなんだな・・・』と一蹴されたけどな・・・

だがあの日から、私の脳裏にはいつもハヤ太君の顔が浮かぶように

なつてしまつたんだ。

最近じゃ夢の中にまで出て来るし・・・

なぜだろう？

ハヤ太君の笑顔が脳裏に焼きついて離れない・・・

いくら考えても、明確な答えが出なくて・・・

これではまるで恋する乙女ではないか！

小1時間程悶々とした私は、決意した。

三千院家に行き、ハヤ太君に会おうと。

そうすれば、このモヤモヤの謎も解けるだろうと。

そう思った私は、ハヤ太君に会うために三千院家に向かった。

三千院邸

理沙は三千院邸に着き、マリアと玄関で会話していた。

マリア

「いらっしゃい朝風さん。本日は何のご用ですか？」

理沙

「えっと・・・ハヤ太君に会いたいんですけど、彼今どこにいますか？」

マリア

「ハヤテ君なら、ナギと一緒にゲームしてますよ。呼びましょうか？」

理沙

「あ、それならリビングで待たせてもらいます。」

理沙はそう言うと、リビングへと向かった。

数分後、ハヤテとナギがリビングにやって来た。

ハヤテ

「こんにちは、朝風さん。」

ナギ

「よく来たな、朝風。」

理沙

「やあハヤ太君、ナギ君こんにちは。」

ナギ

「今日は何の用で来たんだ？何なら今から一緒にゲームでもするか？」

理沙

「ああ、それも良いんだけど・・・実は今日、私の誕生日でさ。」

ハヤテ

「そつえば前に言っていましたね。」

ナギ

「私もハヤテから聞いた。だからちゃんとプレゼントは用意してあるぞ。」

ナギはそう言うと、イスの上に置いてある袋を持って来た。

ナギ

「私からのプレゼントはポータブルカラオケだ、しかも最新型だぞ。」

「

ナギは理沙にプレゼントを渡した。

理沙

「ありがとう、ナギ君。楽しんで使わせてもらっよ。」

ハヤテ

「ボクからはこれです。」

ハヤテは少し大きめな袋を理沙に渡した。

理沙が袋を開けると、中に桃色のカチューシャが入っていた。

ハヤテ



「朝風さんに似合うと思って選びました。頭につけてみてください。」

理沙は頭にカチューシャをつけた。

理沙

「うわぁ、カワイイ。私にピッタリだ。ありがとう、ハヤ太君。」

ハヤテ

「いえいえ。」

ハヤテは笑顔を見せる。

理沙はその笑顔に見惚れた。

理沙

「あ、マリアさん。ちょっと庭を散歩して来ても良いですか？」

マリア

「良いですけど、1人で大丈夫ですか？」

理沙

「大丈夫ですよ、私は方向音痴じゃないので。」

そう言うと、理沙は走って行った。

理沙は三千院邸の庭を散歩していた。

その顔は少し紅くなっている。

理沙

「（ハヤ太君、あんな笑顔を私に見せるなんて・・・恥ずかしくてマトモに顔を見れないよ・・・やっぱり私、ハヤ太君に恋をしているんだな・・・）」

しばらく歩いていた理沙は、立ち止まった。

理沙

「・・・決めた！フラれたってかまわない！私の気持ちをハヤ太君に伝えよう！！」

理沙はそう決心した。

理沙

「そろそろ三千院邸の方に戻ろう・・・あれ？」

三千院邸に戻ろうとした理沙は、急に立ち止まった。

理沙

「じじ・・・どじじ？」

そう、何と理沙は道に迷ってしまったのだ。

理沙

「ウソオオオ！！この私が迷子おお！！？」

理沙は辺りを見回すが、自分が今どこにいるのか見当がつかない。

理沙

「三千院邸の庭の規模をあまく見てたな・・・しかもこの辺圏外みたいだし・・・」

携帯の圏外表示を見た理沙は、困り顔をした。

理沙

「まあもつしばらく歩けば圏外表示も解除されるだろう。それまでの辛抱だ、少し走ろう。」

そう思った理沙は、走り出した。

タタタ・・・

その時である。

理沙の足が何かを踏んだ。

グニツ！

理沙

「へ？」

理沙が前方に目をやると、そこにはへビが寝ていた。

へビといっても、ウツバミ蟒蛇程くらいの大きさがある巨大な大蛇である。

つまり理沙はそのへビの尻尾を踏んづけてしまったというワケだ。

『シャ?』

へビは何か感じたのか、目を開けた。

そして、自分の尻尾を踏んづけている張本人を見た。

『シャゝッ!』

へビはあまりの痛さに吠え、理沙を睨みつけた。

理沙

「キヤアアアア!」

理沙は悲鳴を上げると、一目散に逃げ出した。

このままここにいれば、自分がどうなるかわかりきっているからだ。

『シャ!』

へビは一瞬呆気にとられたが、すぐにハッとし理沙を追い始めた。

人は死の恐怖に直面すると、何とか生きようと必死になる。

無論、理沙も例外ではなかった。

全速力で走っているし、へビが彼女を追い始めるまで間があったので、少なくとも今は距離がだいぶん開いている。

だが、もし油断すればあっという間に追いつかれてしまうだろう。

そうなれば、理沙の命は風前の灯火も同然だ。

理沙

「ハアハア、ハアハア・・・（もっと速く逃げなきゃ・・・もしここで倒れたら、私は終わりだ！）」

理沙はそう思い、必死に走る。

だが、その焦りが理沙に油断を与えてしまった。

彼女は足下にある小石に気づかなかったのだ。

ズッ！

理沙

「キャッ！！」

理沙は小石につまずき、転んでしまった。

ドサッ！

理沙

「イタタ・・・」

頭をさする理沙。

そんな彼女の耳に、イヤな音が聞こえた。

シュルシュル・・・

理沙

「!?!」

理沙が恐る恐る振り返ると、さっきのへビがやって来ていた。

彼女はへビに追いつかれてしまったのだ。

『シャ〜!?!』

理沙

「キャアアアアッ!?!」

理沙は悲鳴をあげる。

『シャ〜・・・』

へビは舌をチロチロさせると、口を大きく開けた。

ゆっくりと理沙に近づいて来る。

理沙

「あ・・・あ・・・」

理沙は震えながら後退<sup>あとすな</sup>った。

ウバミ類のへビは、ゾウをも飲み込めるほどに口を大きく開けられるという。

か弱い少女1人の体など、たやすく丸飲みできる事だろう。

理沙

「う・・・」

理沙はガタガタと震えている。

その顔には恐怖の表情が浮かんでいた。

理沙

「（わ、私ここで死ぬの・・・？イヤだ！へびに食べられて死ぬなんて！！まだ私、ハヤ太君に気持ちを伝えていないのに・・・こんなところで終わりたくない！！）」

理沙は泣きそうになっていた。

彼女はここで、以前ヒナギクから聞いた事を思い出した。

呼べば、ハヤテがどんな危機にも駆けつけて来てくれる事を。

『シャ～ッ！！』

へびはさらに口を大きく開け、理沙を飲み込もうと襲いかかった。

理沙

「助けて、ハヤ太くん！！！！」

理沙はハヤテの名前を叫んだ。

へびがまさに彼女に食いかかろうとした、まさにその時であった。

「疾風の如く!!」

ヒュッ!!

どこからかハヤテが飛んで来て、理沙を抱きかかえ木の上に飛んだ。

トンッ!

ハヤテ

「大丈夫ですか、朝風さん?」

理沙

「あ、うん・・・大丈夫・・・」

理沙は赤面していた。

ハヤテ

「とりあえず、先にあのヘビを何とかしないとイケませんね。朝風さんはここでジッとしていてください。」

理沙

「え?何とかするって、ハヤ太君どうやって・・・」

ハヤテ

「疾風の如く・閃光!!」

ハヤテは木の上から飛ぶと、ヘビの頭を直撃した。

ズガンッ!!



へビはふらつき、そのまま倒れた。

ズズン・・・

間髪入れずにへビめがけてナイフを投げ、トドメを刺す。

ドスッ!!

ハヤテ

「これでへビは倒しました。朝風さん、もう大丈夫ですから降りて来てください!」

ハヤテは木の上にいる理沙に言った。

理沙

「う、うん、降りたいんだけど・・・足がすくんで、動けないんだ・・・」

理沙は子猫のように縮こまっている。

ハヤテ

「わかりました。少し待ってください。」

ハヤテはそう言って木の上に飛ぶと、さっきと同じように理沙を抱きかかえた。

バッ!

理沙

「キャッ!！」

そのまま飛び降りると、彼女を抱えたまま歩き出した。

理沙

「（こ、この状態って・・・）」

俗に言う『お姫様抱っこ』である。

理沙

「（は、恥ずかしい・・・でも、ハヤ太君にしてもらってるから良  
いかな・・・）」

理沙は、顔が赤くなっていた。

しばらく歩くと、ハヤテは理沙を降ろした。

ハヤテ

「もう歩けますか？朝風さん。」

理沙

「う、うん・・・」

ハヤテ

「そうですね、良かったです。」

ハヤテは満面の笑みを見せる。

理沙はその笑顔に惹かれた。

理沙

「な、なあハヤ太君・・・」

ハヤテ

「何ですか、朝風さん？」

理沙はハヤテの顔に見惚れながらも、決意したようにハヤテに言った。

理沙

「ハヤ太君・・・私は君が好きなんだ。」

ハヤテ

「え！」

ハヤテは突然の告白に驚いた。

ハヤテ

「なぜ、朝風さんがボクの事を？」

理沙

「ホラ、こないだ泉の家に行ったろ？あの日は美希と一緒にしばらくいたんだが、その時私『ハヤ太君は私にゾッコンだろ？』と美希に言っただ。」

その日から、ハヤ太君の事が頭から離れなくてさ。

このモヤモヤは何なんだろうとずっと考えていたんだが、今日三千

院家で君に会ってプレゼントをもらった時に気づいたんだ。私は君の事が好きになっていたんだってな。でもハヤ太君には私以外にも想いを寄せている人がいるし、私にはヒナや泉に勝てる要素がない。ハヤ太君に選ばれないかもしれない・・・そう思ってたんだ。」

ハヤテ

「・・・」

理沙

「でも、さっきヘビに襲われた時、ここで死にたくないと思った。せめて君に想いだけでも伝えておきたいって・・・そう思ったんだ。だから、迷惑かもしれないけど聞いてほしい！私、理沙は・・・ハヤ太君の事が好きです！！」

理沙の告白に、ハヤテはしばらく沈黙する。

そしてニコツと微笑むと、理沙を抱き締めた。

ギュッ！

理沙

「ハ、ハヤ太君！？」

理沙は赤面する。

ハヤテ

「ボクも朝風さんの事が好きです。ボクは朝風さんの家に行ったあの日から、朝風さんの事が気になっていたんですよ」

理沙

「そ、そんな前から・・・ありがとう、ハヤ太君。わ、私とつき合  
ってくださいか・・・？」

ハヤテ

「はい、喜んで」

ハヤテと理沙は、キスをした。

その後私とハヤ太君は三千院邸に戻り、ナギ君とマリアさんに交際  
を発表した。

2人共最初は驚いていたが、快く私達の間係を認めてくれた。

今年の私の誕生日は、今までで一番最高の日になったと思う。

あの日からずっと気になっていた、男の子と恋人同士になれたのだ  
から。

私は今、とても幸せです。

ハヤ太・・・

イヤ、ハヤテ君・・・

大好きですよ

必ず幸せになりましょうね

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6539e/>

---

一番幸せな誕生日

2011年1月25日02時31分発行